

平木
健典

あなたに花が咲くように

【人物一覧表】

- 宮本千花（17） ∴ 高校生
- 染田源司（73） ∴ 千花の隣人・元教師
- 宮本絵里（45） ∴ 千花の母
- 染田諒一（33） ∴ 源司の息子
- 染田愛美子（30） ∴ 諒一の嫁
- 染田清美（59） ∴ 源司の妻・故人写真のみ
- 染田理菜（6） ∴ 諒一の娘
- 大塚丈治（57） ∴ 千花の高校の校長
- 野間貴子（33） ∴ 千花の担任教師
- 八住徹也（46） ∴ 千花の高校の教師

その他

【あらすじ】

高校生の宮本千花は、素行の悪い生徒だ。

金髪にピアスあけて学校はサボりがち。親しい友人はひとりもない毎日を送っている。

そんな千花にとって、家族は他人のようなものだった。両親の離婚によるシングルマザーの家庭では、母親といる時間は何よりも少なかったからだ。一人で生きて一人で死んでいく。すでにそんな将来を口にする千花のそばにいた大人は、隣りに住む染田源司だった。幼い頃から、ひとりで遊ぶ千花を気に掛けていた源司は彼女に将棋を教え、二人は罵り合いの喧嘩をしながら将棋を差す間柄になっていた。

そんな折、千花が売春していたと学校でデマを流されて呼び出される事件が起こる。不良でありながら成績優秀であった千花を嫌うクラスメイトの仕業だ。シングルマザーの家庭、容姿や普段の素行の悪さを責められ、どうせ誰も信じないと黙り込む千花。

そんな彼女を助けたのは源司だった。源司は千花の高校の元校長だったのだ。

言葉にしなきゃ伝わらない。

そう千花に説く源司だったが、それは自身への後悔でもあった。源司は仕事一筋で妻に先立たれたあと、一人息子の諒一に何もしてやれず疎遠になっている過去があったのだ。

一番近くにいる家族だからこそ、言葉を交わせ。その源司の言葉を胸に、千花は迎えに来た母の宮本絵里と喧嘩する。そのおかげで互いに本音をぶつけ合った千花と絵里は少しだけ関係が改善するも、その矢先、源司が病気で倒れてしまう。

そのまま亡くなった源司の死に実感を持たずにいた千花は、源司の息子である染田諒一と会う。すれ違ったままの源司と諒一に対し、千花は源司の後悔や思いを伝えると、諒一は源司の将棋盤を千花に託した。その将棋盤を前にして、はじめて千花は、家族の大切さと父親同然だった源司の喪失に涙するのだった。

○アパート・外観（夕）

古びた二階建ての木造アパート。

○アパート・宮本家の部屋（夕）

二階、1LDKの部屋は物が多くて片付けができていない印象。

奥のリビングで寝転がりながらスマホをみている宮本千花（17）。金髪にピアスを付けた外見。窓は開いており、吊された風鈴が音色を奏でている。

そのそばで宮本絵里（45）が出かける準備をしている。

絵里「千花、お母さん仕事行くから、夜は適当に買って食べてね」

千花、スマホをみながら

千花「んー」

絵里、財布から千円札を一枚、ダイニングテーブルに置いてから部屋を出て行く。鍵が閉まり、絵里の足音が遠ざかっていく。

千花、散漫な動きで起き上がり、テーブルの上の千円札
てに取る。

千花「ゲット」

千花、千円札をポケットに入れてから
棚からポテチを取り出す。開封しよう
としたところで、どこからかトライア
ングルの楽器の音色が聞こえてくる。
動きを止める千花。ため息をついてか
ら、窓まで行って外を見下ろす。
窓の外、アパートの隣りには立派な日
本住宅がある。その庭からアパートを
見上げている染田源司（73）がトライ
アングル片手に鳴らしている。

源司「おう、千花。やっぱりいたか」

千花「いたかじゃねえよ。うるっさいだよ、
それ」

源司「だから呼び出しにはちようどいいんだ
ろうが。暇だろ？ 差そうぜ？」

源司、将棋を指す手つきをする。

千花「忙しい」

源司「はんっ。どうせ夕飯、菓子で済まして

電気板をポチポチするだけだろうが。メシ

も用意してある、さっさと来い」

源司、家に入っていく。

千花「電気板って……じじい」

千花、ポテチの袋を手に気怠そうに部屋を出て行く。

タイトル「あなたに花が咲くように」

○染田家・外観（夕）

立派な門構えを擁した日本住宅。表札には染田と書かれている。隣りには塀を挟んで、千花のアパートが建っている。

○同・縁側（夜）

情緒のある和風の庭に面した縁側で、将棋を差している千花と源司。隣接す

る居間の座卓には食事を終えた皿が広がっている。将棋盤のそばには蚊取り線香と皿に盛られたポテチがある。

源司、ポテチを食べながら酒を飲んで

源司「うん、最近の菓子は悪くないな」

千花「けっこう昔からあるけどな、それ」

慣れた手付きで駒を動かす千花。

源司、将棋盤を睨みながら

源司「母ちゃんは今日も仕事か」

千花「ああ」

源司「ナースだったよな。シングルマザーで

よくやってる、たいしたもんだよ」

千花「いまナースって差別用語だぞ」

源司「ああ？　じゃあなんて言うんだよ。あ

あ看護婦か」

千花「いやそれ変わってねえから。看護師だろ、男もやってんだよ」

源司、あからさまに嫌な顔をしながら、

駒を動かして

源司「じゃあなんだ、俺は入院したら男に世

話されなきゃならんのか」

千花「マジ脳みそ化石だな、あんた」

千花、思案せずに駒を動かす。

源司、再び将棋盤を睨む。

源司「まったく嫌な時代になったもんだぜ」

千花「もうたいして寿命残ってねえんだから

別にいいだろ」

源司「なめんなよ。俺は三桁目指してんだ。

予定も五年先まで埋まってるんだぜ」

源司、自信満々に駒を動かす。

千花「はいはい、頑張つて。はい王手」

千花、駒を動かす。

源司「なっ、ちょっとそれタンマ！」

千花「だめー、タンマは一週間で三回までっ

て決めたろ。今日は日曜日、もうストック

ありません」

源司「数え間違いじゃねえのか、そんな使っ

てねえぞ」

千花「ついに数も数えられないほどボケたか。

そりゃ負けるわけだよ」

源司「くそが」

源司、腕を組んで将棋盤を睨む。

千花、眼を細めて源司を見つめている。
る。

源司、唸りながら

源司「ええい、ちくしょー！ 負けたああ」

源司、将棋盤をひっくり返して駒をぶちまける。

千花、源司の行動に驚きもせず

千花「はい、おつかれー。食器洗い頑張ってる」

源司「くそー。最初はへっぽこだったくせに

よお」

千花「何年前の話してんだ。ちなみにこれで

私は987回目の勝利だから」

源司「はん、負けは何倍もの数だけだな」

千花「小学生の時もカウントしてんだろそれ、大人げねえな」

二人して、散らばった駒を拾い始める。

源司「小学生か。あんな小っちゃかったくせに、今じゃ高校生、人の子の成長ははやい

な」

千花「最初はどこの誘拐犯かと思ったよ」

源司「懐かしいな。いつつも一人で遊んでてよ。道路に飛び出したりすんのもしょっちゅうだったから、気にならねえほうがおかしいわ」

千花「元教師の性かよ。おせっかいが」

源司「相変わらず友達いねえのか、おめえは」

千花「うるせ」

源司「彼氏の一人や二人いてもおかしくない歳だろうによ、もったいねえ。青春しろ青春」

千花「冗談だろ。他人と和気藹々なんて趣味じゃねえよ」

千花と源司、駒を拾い集め終わって

源司「母親ともか？」

千花「……さあどうかな」

源司「家族とはちゃんと話せ。いつまで一緒にいられるかわからないんだからよ」

千花、居間にある棚の上にある写真立

てを見る。写真には染田清美（59）
が写っている。

千花「経験則？」

源司「さあどうかな」

千花、縁側から靴を履いて外に出る。

千花「私と母親はそんなじゃないよ。卒業

したら家出るつもりだし」

源司「そういう気持ちを話せて言っただ
よ。言葉にしないと、伝わらないんだぜ」

千花「それも経験則？」

源司「いいや。昔の映画の受け売りだ」

千花「説得力ねえー」

千花、軽く手を振って去って行く。

源司「ああそうだ、千花。お前この前の全国
模試どうだったんだ？ 結果聞いてねえぞ」

千花、だるそうに振り返って

千花「おかげさまで、全国五十位以内に入り
ましたよ、センサー」

源司「まあまあだな。で、数学は何点だった？」

千花、あからさまに顔を逸らして口笛

を吹く。

源司「まったく：：どうせ公式とか飛ばしたんだろ。問題と答案、次のとき全部持ってこい、復習するぞ」

千花「いいよ、私文系なんだし。東大A判定出してんだぞ」

源司「ダメだ。いつも言ってるんだろ、勉強はやりたいことを見つけるための準備。ここで怠らないことが大事なんだ」

千花「大学行く気なくても？」

源司「なくてもだ。お前は学生なんだ」

千花、舌打ちをして去って行く。

源司「母ちゃんにここでメシ食ってることちやんと言っておけよ」

返事をせずに去って行く千花。

源司、ため息をつくも嬉しそうに微笑む。

○同・居間（夜）

一人、菓を飲んでる源司。ふと、棚

の上の写真立てに眼を向ける。

源司「……家族と話せ、か。どの口が言ってるだつて話だよな」

源司、ガラス戸が開け放たれたままの縁側の外の庭を見つめる。
外は虫の音が聞こえている。

○アパート・宮本家（朝）

制服姿で一人、朝食を摂りながら新聞を読んでいる千花。点いたままのテレビでは今日の天気予報が流れている。
疲れた顔で帰ってくる絵里。

絵里「ただいま」

千花、黙々と食事をしている。

絵里「ただいま、千花。あとおはよう」

千花「ん」

絵里「昨日は夕飯どうしたの？」

千花「外で食べた」

絵里「学校の友達と？」

千花「ひとり」

絵里「遅くまで外にいなかったわよね、一人だと危ないわ、あなた、ただでさえ容姿が目立つんだから」

千花「…」

絵里「その髪の色も、いい加減黒くしたらどう？ 校則違反でしょ普通に。特別勉強やスポーツができるわけでもないんだから、ちゃんとした身だしなみでいないとー」

千花「(遮って) 朝っぱらから元気だね」

千花、新聞を乱暴に畳んで

千花「こっちは一日の始まりだからさ、朝からガミガミ言わないでくれない？ うざいから」

絵里「でもね、千花」

千花「お仕事お疲れさまです。はやく寝たら？」

千花、鞆を持って玄関を出て行く。

絵里「千花」

千花、返事をせずに扉を乱暴に閉める。

○隅戸高校・外観（朝）

年季の入った校舎の公立高校。生徒が
多く登校してきている。

○同・昇降口（朝）

気怠そうに靴を履き替えている、千花。

校内放送が流れる。声は八住徹也（46）

八住の声「二年G組宮本千花。二年G組宮本

千花。登校次第、校長室に来なさい」

千花「……」

首を傾げながら顔をしかめる千花。

そばを通った女子生徒二人組と眼が合

うも二人組は逃げるように去って行く。

千花、舌打ちをして下駄箱の戸を乱暴
に閉める。

○同・校長室（朝）

室内にはローテーブルを挟んだ二人掛
けソファ―が二つの応接セットとオフ
イスデスクがある。

オフィスデスクには大塚丈治（57）、ソファーには八住と野間貴子（33）が並んで座っている。

ノックせずに入ってくる千花。

八住「こらっ、ノックすることも知らんのか」

千花、その場で扉をノックして

千花「担任と生徒指導、校長先生までついたフルコースで何のご用ですか？」

八住「相変わらず、見た目通りで礼儀を知らないな」

千花「お褒めの言葉、痛み入ります」

千花、大塚と目が合う。

大塚、微笑んで見せる。

千花、怪訝な顔で返したあと八住に向けて

千花「で？」

貴子「とにかく、座ってちょうだい」

貴子、向かいのソファーを促す。

千花、渋々座る。

八住「宮本。お前、昨日の夜は何をしてた？」

千花「は？」

八住「（怒鳴り声で）何をしてたかと聞いているんだっ！」

貴子「八住先生、冷静に」

八住「そうしたいのは山々なんですがね」

千花、眉間に皺を寄せながら八住を睨んでいる。

睨み返す、八住。

貴子、一つ咳払いをしてから

貴子「宮本さん、答えてほしいんですけど」

千花、八住を睨んだままで

千花「答える義務ってある？ プライベートなんだけど」

貴子「教育上の問題なの」

千花、視線を貴子に移して

千花「教師の鏡だね。働き方改革なんて名前にかこつけて、学校の外のことは知らぬ存ぜぬの世の中なのに」

貴子「そうね。出来るなら生徒の私情には関わりたくないけれど、問題が大きいと対処

せざるを得ないのよ」

貴子、タブレットを取りだして操作したあと、画面を千花に見せる。

画面には、派手な格好をした千花と男がラブホテルに入る瞬間を撮った写真が写っている。

貴子「学校に送られてきたものよ。何人かの生徒の目撃証言もあって、保護者の方から連絡もあつた」

八住「学校を休んで売春ってわけか。見た目通りだな」

貴子「先生、言葉を選んでください」

八住「失礼。ですが事実です」

千花「……」

千花、タブレットの写真を見つめている。

貴子「あなたの家庭の事情は知ってるわ。家計を助けるためだったの？　もしも興味本位でやっているのだとしたら看過できないわ」

八住「こうした証拠があるんだ。警察に連絡
したうえで事実確認をするつもりだったん
だが」

八住、大塚に目を配る。

大塚「私が、まず本人に話を聞こうとこの場
を設けさせてもらったんです。どうですか、
宮本さん。あなたの言葉を聞かせてくださ
い」

千花、ソファーに背を預けて

千花「家には電話した？」

貴子「ええ、したけど電話に出られなかった
わ」

八住、あからさまに舌打ちをして

八住「これだからシングルマザーは」

千花、拳を強く握り締めるもすぐに弛
緩させる。

貴子「どうなの、宮本さん。校長先生がここ
まで配慮してくれているのよ」

千花、興味を失った目で黙っている。
扉がノックされる。

大塚、腕時計で時間を確認してから笑
みを浮かべる。

大塚「どうぞ」

扉が開き、入ってきたのは源司。

源司「失礼しますよ」

千花、源司を見て呆気に取られている。

千花「じじい、なんで……」

八住「どちらさまでしょうか」

源司「俺か？ まあこいつの保護者ではねえ
けど、身元引き受けできるくらいのもんだ
よ」

貴子「困りますよ。部外者が来られても」

源司「あーまあそうだけどなあ……というか、
お前さん方はいつまで座ったまま俺と喋っ
てるんだ？ 俺は地域住民でちゃんと許可
を得てここを尋ねてるわけなんだが」

八住と貴子、慌てて立とうとする。

源司、手で制止して

源司「あーいいいい。ガキじゃねえんだ、指
摘されて直しても手遅れだ。校長よ、教師

は大概個人プレーな職業だが少しはものを
教えてやったほうがいいんじゃないかい？」

大塚「すみません、徹底しましょう」

貴子「……校長先生、この方とはお知り合
い
ですか？」

大塚「この学校の元校長です」

驚く、千花、八住、貴子。

源司「元だよ、今じゃ権限もないただの老い
ぼれだ、そしてこいつは俺の孫みたいなの
なんだ、ガキの頃から知ってる。いまも
ガキだが」

源司、千花の頭を乱暴に撫でる。

千花、抵抗するように源司の手から頭
を逸らす。

源司、タブレットを手に取って

源司「おーおー、似合わねえ格好してら。こ
の写真はいつのものなんだい？」

貴子「それは昨日の夜に撮られたものです。

ただ昨日だけではなくこれまで何度も彼女
を見たという証言があります」

源司「なるほどなあ。よく撮れてら。最近の
電気板はなんでも出来るんだな。で、千花。
実際はどうなんだ」

千花「……」

源司「言葉にしねえと何も伝わらない。教え
ただろ」

千花「………やってない」

源司、わざとらしく千花に耳を近づけ
て

源司「ええ？　なんだって？」

千花「やってねえって言ったんだよ、くそじ
じい」

八住「だったら、この写真はどう説明するん
だ、動かぬ証拠だろ」

千花「そんなもん、パソコン一つあれば合成
できんだよ」

八住「そんなデタラメを」

源司「これが昨日撮られたってーんならなお
さらだな。昨日の夜はこいつ俺と一緒にい
たからな。夕飯は週に三、四回はうちで食

べてる。まあそのあと出かけてれば話は別だが」

源司、千花を見る。

千花「冗談だろ。昔からえげつない課題出すくせに。わざわざ深夜に電車乗ってラブホ街行く時間なんかねえよ」

源司「俺は家庭教師でもあるんですわ」

八住と貴子、顔を見合わせて

貴子「ですが、生徒から証言が」

源司「それを精査するのはあんたらがやることなんじゃないのかい？」

八住、むきになるように

八住「しかし、そうでしたかと済ますわけにはいきませんよ。実際に問題なっているんですからね」

源司、ため息をついて千花の隣りに座る。

源司「……まあ言いたいことはわかるけどよ、

先生。千花の見た目はこれだし、おまけに礼儀の欠片も持ってない。戦後の日本じゃ

ないんだ、見た目ってのはそいつを知る大事な情報さ、こいつが謂われない誤解を受けるのは仕方ないと思う。だがなあ俺たち教育者は違うだろ、心を見るってのが大事なんじゃないのかい？」

八住「ご高説痛み入りますが、散々注意しても直さない、聞く耳を持たない生徒に出来ることは限界がありますよ」

源司「限界ねえ。あんたは教育に限界を感じてるのに、まだ教師で在り続けるわけか。良い職業になったもんだな、教師は」

八住、ぐっと黙る。

源司、立ち上がった

源司「帰るぞ、千花。この流れで教室に行くのは酷だろ。帰って勉強しようぜ」

八住「待ってください。話はまだ」

源司「終わってるよ、千花はやってないって言ってるんだ。俺も証言してる。それともおたくらは疑われている側の声は、少しも聞かないスタンスなのかい？」

八住「……それは」

源司「その写真が合成なら、警察になり専門
機関なりに出して調べてもらえよ。素人が
作ったんだ、プロが見ればすぐにわかるだ
ろ」

貴子「ですが」

大塚「わかりました、宮本さんの言葉は聞け
ましたのであとはこちらで対処します」

八住「校長、いいんですか」

大塚「元々、生徒を警察に突き出すなんてこ
とはするつもりありませんでした。私は宮
本さんの声を聞きたかったんですから」

大塚、千花に微笑みかける。

千花、そっぽ向いて立ち上がる。

源司「あとは大人の仕事ってやつだな、じゃ

あよろしく、先生方」

千花と源司、部屋を出て行く。

○同・昇降口（朝）

靴を履き替えている源司。

千花、源司の背中を見つめながら

千花「……なんで来たんだよ」

源司「大塚から、いや校長から連絡があったんだよ。あいつとは将棋仲間だな。母ちゃんに連絡が取れないから、俺にしてきたんだろ。お前の話はけっこうしてたしな、身元引受人くらいにはなれる」

千花「いいのかよ。売春、してるかもしれないだろ」

源司「バカ。何年教師やってたと思ってんだ」

千花「……」

源司「母ちゃんは？ 家にいるのか」

千花「多分寝てる。夜勤明けだから」

源司「そうか、なら起こすのも悪いな。うちで一局差すか」

源司、振り返って笑いかける。

千花、苦笑して

千花「年寄りには暇人なんだな」

源司「長く働いた特権なんだよ。さっさと靴履き替えてこい」

千花、頷いて下駄箱に向かう。

○染田家・外門前（朝）

やってくる千花と源司。

源司、玄関のそばにある植木鉢の底から鍵を取り出して、鍵を開ける。

千花、絶句して

千花「マジかよ。気でも狂ったか」

源司「あ？ 何が？」

千花「なんで家の鍵そんなところに隠してんだよ。物騒にも程があるって」

源司「昔はどこの家もやってたんだがな」

千花「あり得ない」

源司「はは、これぞまさにレーションギヤツプってやつか」

千花「ジェネレーションギヤツプな。なんだその軍用メシみたいなきヤツプは」

源司、笑いながら家の中に入っていく。

千花、ため息をついたあと、隣りのアパートの自分の家の窓を一瞥してから

源司に続く。

○同・縁側（朝）

縁側に座り、ぼーっとしてる千花。

足つきの将棋盤とともにやってくる源司。

源司「よしやるぞお、昨日負けてっからな」

千花「……あのさ、ぶっちゃけ気分じゃねえんだよ」

源司「なおさら、気分轉換にいいだろ。適当に差してりゃいいさ」

千花「勝ちたいだけの魂胆がみえみえだぞ、くそじじい」

源司、口笛を吹きながら盤の上に駒を広げて並べ始める。

洪々、千花も駒を並べ始める。

千花「……あのさ」

源司「おう」

千花「やってないから、マジで」

源司「ああ、わかってるよ」

千花、駒を並べながら

千花「多分、私のこと退学にでもしたいやつがいたんだと思う」

源司「大人気じゃねえか。心当たりはあるのか？」

千花「……そろそろ顔を見るのも億劫になるやつらばかりだよ。理由は多分、この前の全国模試じゃないかな。私、学校の順位じゃ一位だったから」

源司「ははっ。見るからに勉強出来なそうな金髪女が好成绩叩き出してたら気に入らないやつはいるか、小せえ話だが」

千花「私だってそれなりの時間割いて勉強してんだ、とばっちりだよ」

源司「だから言ったろ。そんな容姿でいたら無駄に不利益被るぞって」

千花「自業自得ってわけだろ、わかってるよ」

源司「だから、言い訳もしなかったのか？」

千花「……」

千花と源司、互いに駒を並び終えて

源司「よし、お前が先攻だぞ」

千花「いや、前局で負けたやつが先攻って決めただろうが。先攻はあんただよ」

源司「ちっ。引っかからなかったか」

千花「引っかかったところで負けは変わらねえからな。負けず嫌い歪んでるぞ」

以降、千花と源司、適宜順番に駒を動かしながら。

源司「なあ千花」

千花「ああ？」

源司「言葉にしないと、自分の気持ちは相手に伝わらんよ」

千花「……またそれか。伝える必要なんてなかったろ。あいつら、最初から私がやってるって決めつけてた」

源司「そうだな。けど、そこで飲み込んじゃまったら自分が傷つく。果てには誰かを傷付けちまうもんだ」

千花、乱暴に駒を動かす。

源司「あの場でお前が話す言葉は、少なくとも

も校長は受け止めてくれたはずだ。どうせ信じない、どうせわかってくれないって気持ちちは、人と人との関係を滞らせちまうんだ」

千花「相手がどう思ってるかなんて、わかんないじゃん」

源司「わかんなくていいんだよ。わかんないから、自分から始めるんだ。それを相手がどう受け止めるかは、相手次第ってやつだ」

千花、納得のいかない顔をする。

源司、笑って

源司「家族にこそ、大事なんだぜそれは。なまじ近くにいるからそういう努力を怠っちまうんだ。母ちゃんとはどうだ？」

千花「……いいんだよ、家族なんて。どうせ人間、一人で生きて一人で死ぬんだ」

源司、手を止めて盤を見つめる。

源司「俺にはな、息子がいたんだ」

千花「死んだの？」

源司「遠慮がねえな。というか死んでねえよ。」

結婚して独立してる。もう十何年も会ってないがな」

千花、居間の写真が飾ってある棚を一瞥して

千花「写真ないのは、そういう理由？」

源司「まあな。母親が死んだときにあいつは自分の物は全部持ってたんだ。二度と帰ってこないって意思表示だろう」

千花「嫌われすぎだろ、何したんだよ」

源司「何もしなかったんだ」

源司、自嘲的な笑みで駒を動かす。

源司「俺は教師をやってて、人の子のことばかりで家のことは全部家内に任せたまんまだった。一緒に遊んでやった覚えもない。家内が死んでからは、何を話したらいいのかわからなかった」

千花「さぞ、奥さんは苦労しただろうね」

源司「そうだな。俺と息子のために色々してきてくれた。苦労をかけていたのに、あいつの病気がわかったときはもう手遅れだ

った。きっと息子はそれも恨んでるんだろ
う」

千花「それは、あんただけの責任じゃないだ
ろ」

源司、苦笑して

源司「ちゃんと話せばよかった、たったそれ
だけだったんだ。時間も機会も腐るほどあ
ったはずなのに、俺は怠って、ここで一人
で暮らしてる」

源司、ゆっくりと駒を動かす。

千花「後悔してんのかよ」

源司「かもな」

千花「嫌われてたなら結果は同じだったんじ
ゃねえの」

源司「俺が後悔してんのは、種を撒かなかっ
たことさ」

千花「種？」

源司「そう。自分という種を目の前の相手に
撒く。その種に水をあげて花を咲かすのは
相手次第だ。時間がかかるかもしれない、

水なんてあげてくれないかもしれない。けど、顔を見て、触れ合って、相手のことを思っ言葉伝える。心で繋がろうとすることが大事なんだよ。俺はそれを息子にしなかったんだ、それだけがな」

千花「心、ね」

源司「昔はそれが当たり前だったんだがな、いまの世の中は、SNSだったか？ あんなんで繋がった気になってるから人との齟齬が生まれちまう。目の前の人に対しても、同じように振る舞ってしまう。家族が良い例だよな」

千花「あんたのときはSNSなかったろ」

源司「そうだ、だからこそ罪が重い。その罰として俺はいつか一人で死ぬんだ。千花、お前にはそうなって欲しくないんだよ。ちやんと人と繋がれ、自分からだ。家族と繋がっていれば、一人にはならないよ」

千花「……」

源司、意気揚々に

源司「それに俺はよ、一人で生きてる分、人に迷惑掛けないようにいろいろと準備してるんだぜ。この前なんか、カメラマンがキレるくらいまで撮り直させて最高のハンサムな遺影を用意したんだ」

千花「三桁生きるんじゃないのかよ」

源司「そのときに向けての、準備だよ。動けるうちにな」

千花、言い淀みながら

千花「……一人じゃねえだろ」

源司「ん？」

千花「少なくとも……あなたの花は、私に咲いてるよ」

呆気にとられている源司。

千花、照れるように

千花「あなたの番だよ、早く差せよじじい」

源司「ははっ、お前の花も俺に咲いてるぜ」

千花「うるっせ。っーかこの表現マジでくせえから。加齢臭するわ」

源司「なんだとこら。すげえ上手いこと言う

なつて思つちやつてたんだが」

千花「残念でした、勘違いです。早く差せよ、

あと五手で詰むぞ」

源司「バカな……」

源司、盤を睨んで考える。

チャイムの音が鳴る。

源司、縁側から外に向かつて

源司「誰だあ。開いてるよー、庭の方に来て

くれ」

千花「応対が昭和すぎ」

絵里の声「……失礼します」

絵里の声にハツとする千花。

庭にやってくる絵里。

源司「おや、これはこれは」

絵里「遅くなって申し訳ございません。千花

の母です」

源司「ええ、こうしてお会いするのは初めて

かもしれませんね。染田源司です」

頭を下げ合う、源司と絵里。

絵里「千花」

千花「……」

千花、絵里とは目を合わさない。

絵里、将棋盤を見て怪訝な表情。

絵里「千花、帰るわよ。話があるわ」

千花「私にはない」

絵里「千花、いい加減にしなさい。お隣さんにこんなご迷惑をかけてるのよ」

千花「年寄りの下手くそな料理、毒味してるんだ。将棋の相手もしてる。迷惑にはなっていない」

絵里「……何言ってるの？ 毒味？」

源司「あぁー……いや、それは言い方がなんとも。おい千花、やっぱり母ちゃんに言っ
てなかったか」

千花「どうだったかな」

源司「お前な」

千花「いいだろ別に。早く差せよ」

絵里「（怒鳴り声で）千花っ！ 何の話をしてるのっ！」

千花「うるせえな、デカイ声出すなよ」

絵里「あなたはいつもそう。人の目を見て話さない。聞いて何も答えない。小さい頃から仕事ばかりで寂しい思いさせてるから、私はあんたの言うことは聞いたし、自由にさせてたわ。その結果がこれなのね」

千花、眉間に皺を寄せて、絵里を睨む。

千花「じゃあ母さんは、私が売春してたって思ってるわけだ。聞いたんだろ、学校から」

絵里「だからその話をしにきたのよ」

千花、何かを言いかけるもやめる。

源司「千花、もう忘れたのか」

千花、源司を見る。

源司、頷いてみせる。

千花、嫌々ながらも、意を決したように息を吐く。

千花「……：……今ごろ迎えにきて、親面してんじやねえよ」

絵里「え？」

千花「今の今まで寝てたんだろ。じじいが来なかったらあんたはここじゃなくて、警察

署に迎えに行くはめになつてたかもな」

絵里「じじい、つてあんたそんな呼び方」

千花「小学生のときからここにずっと遊びに来てる。一人で遊ぶより、友達と遊ぶよりずっと楽しかった。ここで一緒にメシ食つて、将棋差して、いろんな話するのが楽しかったんだ」

絵里「そんな前から……」

源司、ぼつの悪そうに肩をすくめる。

千花「さつき、寂しい思いさせたって言ったよな。お門違いだよ、私は寂しくなんかかった。じじいがいたからじゃない、友達がいなかったからじゃない。私は別にひとりでもよかった、だって母さんはちゃんと帰ってくるから、寂しいとか思ったことなかったよ」

千花、拳を握り締める。

千花「人の目を見て話さない？ 聞いても何も答えない？ ふざけんなよ。ガキの頃はいっぱい話したよ。でもあんたは聞かなか

ったじゃねえかよっ！」

千花、絵里を睨み付ける。

絵里、唾然として千花を見つめる。

千花「仕事から帰ってくるまで、私は待って
たよ。今日はこんなことがあった、楽しい
ことがあった、笑ったことがあったって準
備して毎日待ってたんだよ。でも母さんは、
いつも疲れた顔して上の空で、いきなり怒
鳴られたこともたくさんあった。私がどれ
だけあなたの顔色伺ってたかなんて、考え
たことあったかっ？」

絶句している絵里。

千花、絵里から目を逸らして

千花「シングルマザーだって陰口叩かれても
気にしなかった。父親なんていらねえよ。
でも離婚したのはお前らだ、子どもの私に
は関係ないっ！　なんで私がそんなことま
で神経使わなきゃいけないんだよ」

絵里「……言われて、たの？　そんなこと」

千花、絵里を一瞥したあとゆっくり息

を吐き出して

千花「別に、責めたいわけじゃない…：売春もしてない、あれは嵌められただけだし、別にシングルマザーがどうこうって話じゃないから」

絵里「…：」

千花「私は高校出たら家を出るよ。私がいなくなれば、あんたも楽になるだろ。それだけだ」

千花と絵里、お互いに俯いて沈黙する。

源司、大きく手を叩く。

源司「さて、ぶっちゃけ話が終わったところで少し早いけど昼メシにしないかい？ お嬢さん方」

源司、ニヤリと微笑む。

○同・居間

豊部屋。落ち着かない様子で、ちやぶ台の前で座っている絵里。頻繁にお茶を少しずつ飲んでいく。

源司の声「バツカ、お前もつと胸肉薄く切れよ」

千花の声「いいだろ、サラダチキンなんだから。火通すわけじゃないんだし」

居間と繋がっている台所に目を向ける
絵里。

台所では、千花と源司が並んで料理を
している。

源司「よし、あとはじっくり煮込んでつと。

おい、千花。メシ炊いとけ」

千花「人使い荒えな。無洗米にしたんだろうな」

源司「馬鹿野郎、洗わない米なんて米じゃねえよ」

千花「バカ舌のくせにこだわりやがって」

源司「グダグダ言っていないで手動かせ。水少なめぞ、柔らけえ米はただのゲロだ」

千花「料理してるときにゲロとか言ってるじゃねえよ、くそじじい」

源司、急須を手に居間にやってくる。

源司「すみませんね。お嬢さんをお借りして
して」

絵里「いえ、そんな」

源司、絵里の向かいに座り、絵里の湯
飲みにお茶を入れる。

源司「週に何回か、私が千花さんを招いてこ
こで食事をしていました。すみません、私
からご挨拶すべきところを」

源司、絵里に頭を下げる。

絵里「いえ、こちらこそ」

源司「いつだったか：：まだ小学生だったあ
いつが外で一人で遊んでましてね。ボール
を使ったり道路によく飛び出しててまあ危
なっかしくて、私が近くで見守っていたん
ですわ。定年退職をして家内も亡くして暇
だったもので」

絵里「それは、何も知らずにありがとうございます
います」

源司「いやいや、いま思えば自分のためだっ
たんだと思います。家族に何も出来なかつ

たという閉塞感がずっとありましたから」

○同・台所

千花、米を洗いながら話を聞いている。

○同・居間

ちやぶ台を挟んで話している、源司と

絵里。

源司「少しして、千花も私を意識し初めて一緒に遊ぶようになりました。ただこの老体では毎日の外遊びはなかなかしんどいところがありまして、私の趣味を押しつけてしまいました」

絵里、縁側に置いたままの将棋盤を見る。

源司「料理の方は、まあ健康のためにと定年してからは色々練習をしてみして、なんの流れだったかメシと一緒に食うようになりました。夕食は一人のときが多いようだったので」

絵里、気まずい顔で

絵里「……小学校の高学年に上がってからは、夜勤をメインにしていましたから。どうしても」

源司「ナース、じゃなかった。看護師さんなら、

絵里「はい」

源司「いつもご苦労様です」

源司、頭を下げる。

絵里「そんな、たいしたことでは」

源司「いやいや、年をとればとるほど、病院という場所とそこで働く方々に感謝が深くなるものです」

絵里「……どこか具合が悪いところがあるんですか？ 顔色があまり良くないように見えます」

絵里、源司の後ろにある棚を見つめる。

棚には薬の袋がいくつも置いてある。

源司、苦笑して

源司「さすがはプロですね。なに年相応のガ

夕ですよ」

絵里、台所にいる千花を見て

絵里「娘が料理をしているところを初めて見ました。あんなに楽しそうにしているところも」

源司「罵り合ってるだけですがね」

絵里「私はあの子と喧嘩したことはありませんでした」

源司「たったいま、されたじゃないですか」

絵里「子どもに顔色を窺われてたなんて、親失格ですよ」

源司「親に失格も合格ありませんよ。あるのは人と人がどう繋がっていたかです。いつの時代もそれだけ是不変わらない。まだまだこれからですよ、お母さん」

顔を見合わせる、源司と絵里。

絵里、涙を浮かべて頷く。

やってくる千花。

千花「自分に出来なかったこと押しつけてんじゃないぞ、くそじじい」

源司「はん、いいだろ。経験談は大事だぜ」

千花「鍋、吹いてるぞ」

源司「おいおい、火止めるよ」

源司、慌てて台所に向かう。

千花と絵里、目が合うも千花から先に目を逸らす。

絵里「ごめんね、千花」

千花「……」

絵里「良かったら、今度将棋教えてくれない？」

お母さん、全然わかんないから」

千花「まあ、いいけど」

千花、頭を掻きながら絵里の方は見ずに

千花「さっきは……言い過ぎたよ。ごめん」

絵里、嬉しそうに首を横に振る。

絵里「これからのこと、ゆっくり話そ？」

千花、照れるように頷く。

台所で大きな物音。

千花と絵里、台所の方を見ると源司が倒れている。

千花「おいじじい。なにコケてんだよ。ついに足下も弱ったか？」

源司、反応なく倒れたまま。

千花「おい、じじい？」

絵里、素早い動きで台所へ向かう。

○同・台所

流しの前で倒れている源司。

やってくる、絵里。点いたままのガスの火を止めて源司を仰向けに寝かせて手を握る。

絵里「染田さん、聞こえますか？ 聞こえたら手を握ってください」

源司、反応しない。

千花、やってくるも動揺しながら源司を黙って見つめている。

絵里、源司の脈を取りながら

絵里「千花、救急車呼んで。119番」

千花、放心状態で源司を見つめている。

絵里「千花、早くっ」

千花、はっとして震えた手でポケットからスマホを取りだして開く。

番号を押そうとするも、指が震えて上手くいかない。

千花「くっそ、くそ。なんだよこれ」

絵里、冷静に千花を見て

絵里「千花、代わるわ。染田さんに声かけ続けて」

絵里、立ち上がり千花の肩を支える。

絵里「大丈夫、大丈夫だから」

千花、動揺を隠せないままで頷く。

絵里、千花の肩をポンと叩いてスマホを受け取る。

千花、源司のそばに座り、顔を覗き込む。

千花「……おい、じじい」

千花、源司の手を握ろうとするも躊躇う。

源司、自分から千花の手を弱々しく握る。

千花「おい、大丈夫かよ」

源司、薄目を開けて千花を見て何かを
呟く。

千花「あ？　なんだよ。聞こえねえぞ」

千花、源司の口元に耳を寄せて

源司「お前の、母ちゃん、かっけえなあ……」

千花、絵里の方を見る。

絵里、電話で話している。

絵里「はい、救急車一台です。おそらく持病
があります」

絵里、居間の方へ歩いていく。

千花、源司の手を強く握り返す。

千花「ああ、ああ……そうだな」

源司、ニヤリと笑って目を閉じる。

千花「おいじじい。ふざけんなよ……いきな
り過ぎだろ」

源司、眠ったように動かない。

千花「三桁生きるんじゃないのかよ、五年先
の予定はどうすんだ」

千花、縁側にある将棋盤を一瞥して。

千花「まだ、あんたの番が終わってないだろうがっ！」

千花、源司の手を強く握ったまま叫ぶ。

○同・縁側（夕）

ガラス戸を開けて、縁側に座りながらぼーっと夕暮れの空を見つめている千花。ひぐらしの鳴く声が響いている。傍らには、足つきの将棋盤が駒が片付いた状態で置いてある。

千花の心の声「後日、私にかけられた疑いはあっさりと晴れた。問題が大きくなるにつれて、謀った生徒何人かが罪悪感に負けて自首してきたらしい。理由は、やはり自分の成績が私に負けたという腹いせだったそうだ」

千花、吹き出すように笑って

千花「……それで自分の成績がさらに落ちて
ちや世話ないよな、じじい」

千花、将棋盤の方を見るも誰もいない。

無表情で将棋盤を見つめる千花。

扉が開く音がする。

諒一の声「鍵が開いてるぞ」

愛美子の声「ホントね、閉めたつもりだったんだけど。あ、理菜待って」

縁側に面した庭にやってくる、染田理

菜（6）。

顔を合わせる、千花と理菜。

理菜、千花の外見に言葉なく恐れおのいている。

千花、笑って

千花「そんな顔すんなよ、同じ人間だぜ」

やってくる、染田諒一（33）と染田愛

美子（30）。

理菜、愛美子の足に抱きつく。

諒一、敵対心に満ちた顔で

諒一「誰ですか、あなたは」

千花「あー……なんだったんだろうな、私は」

愛美子、千花をまじまじと見つめている。

諒一、スマホを取りだして

諒一「不法侵入だな。これだから最近のガキは。すぐに警察に」

愛美子「(遮って)待って。もしかして、宮本

千花さん、ですか？」

千花「誰？」

愛美子「お義父さんが電話で話してましたよ。

一緒に将棋したり料理したりする子がいるって」

千花「じじいのことだから、金髪のクソガキがいるって言うってたんじゃない？」

愛美子、苦笑しながら諒一に

愛美子「お隣に住んでる宮本千花さん。お義父さん倒れて救急車呼んでくれたのも彼女よ」

千花「いやいや、私はテンパって何も出来なかったよ。ちゃんとしたのは、看護師の母さんだけ」

愛美子「でも、そばにいてくれましたよね。最後まで」

千花「……ってことは、あなたは一人息子の
お嫁さんってことでいいの」

愛美子「はい。染田諒一と愛美子です。この
子は理菜。落ち着いたらご挨拶にいくつも
りだったんですが、この度は色々ありがとう
ございました」

千花「いいって。ホントに私は何もしてない
し。まあ不法侵入は免罪にしてよ、鍵がア
ホなところにあるの知ってたからさ」

千花、鍵を諒一に向けて放る。

諒一、鍵を受け取ってから将棋盤を見
つめて

諒一「あいつが、将棋を教えたのか？」

千花「そうだけど」

諒一「料理もした？」

千花「まあ。最初はくっそ下手だったけどな」

諒一、ゆっくりと千花に歩み寄り、将

棋盤に触れる。

諒一「相変わらず人の子のことばかりだな。

俺には、教えなかったくせに」

千花「やりたかったの？」

諒一「忘れたよ」

千花「ちゃんと伝えたのかよ、言葉で。将棋

一緒にやろうぜ、教えてくれって」

諒一「……忘れたっていつてるだろ」

千花「大人だから子どもの気持ち察しろよ、

とかは無理ゲーだからな。言いたい気持ち

はわかるけど、それで自分から何もしなか

ったら、お互い様だぜ」

諒一「あいつが言いそうなことだ」

千花「さすが息子。受け売りだよ」

千花、立ち上がった

千花「じゃあ、さよなら。もう来ないから」

千花、理菜の頭を撫でてから立ち去る。

諒一「この将棋盤、持っていくか？」

千花、足を止めて

諒一「この家は取り壊して更地にして売るつ

もりだ。これも捨てることになる。うちは

誰も、将棋は差せないからな」

千花「……ここ、壊すんだ」

諒一「ああ。いい思い出がない」

千花、家の外観を見つめて

千花「そっか……じゃあ、貰うよ」

千花、諒一から将棋盤を受け取る。

千花「じじい、後悔してたよ。あんたとちやんと話さなかったこと」

諒一「遅すぎるな」

千花、苦笑する。

千花「家のどこかにさ、遺影用に写真あると思うから探して使ってやってよ。ハンサムに撮れたらいいからさ」

諒一「……わかった」

愛美子「宮本さん、葬儀にはお越しく下さい。

良ければ納骨まで」

千花、寂しそうに笑みを浮かべて首を横に振る。

千花「気遣ってくれるならさ、もう一つ、欲しいものあるんだけどいい？」

首を傾げる、諒一と愛美子。

○宮本家・玄関（夜）

靴を履いている絵里。

絵里の後ろで見送っている千花。

絵里「じゃあ行ってくる。朝には帰るけど、

千花の出る時間には間に合わないと思うか

ら、学校遅刻しないようにね。夕飯は」

千花「（遮って）なんか作るよ」

絵里「そう」

絵里、千花を心配そうに見つめて

絵里「千花、大丈夫？」

千花「……何が？」

絵里「ごめん、なんでもない。じゃあね」

絵里、扉を開ける。

千花「母さん」

絵里「ん？」

千花「行ってらっしゃい」

絵里「うん。行ってきます」

扉が閉まり、家の中へ戻る千花。

○同・キッチン（夜）

千花、ぼーっとした顔で

千花「さて、何作ろっかな」

どこからか、トライアングルの音色が聞こえる。

千花、パッと笑顔になってリビングの方へ走り出す。

○同・リビング（夜）

電気のついていないリビングの窓の方まで走る千花。窓の麓には将棋盤が置かれている。

千花「うるせーぞ、じじい」

千花、嬉々とした顔で勢いよく窓を開ける。しかし、窓の外の染田家の電気は点いておらず真っ暗。

千花、反転、表情を落として

千花「……そっか」

千花、リビングの壁を見る。そこにはトライアングルの楽器が飾られている。

千花、苦笑して将棋盤の前に座り、駒を広げて並べ出す。

自分側と相手側の駒を一つずつ並べながら、涙を流す千花。

千花「あーあ、センチメンタル過ぎるぜ。らしくねえ、らしくねえよな」

千花、堪えようとすることも止まらない涙を袖で拭い続ける。

駒を並び終え、深呼吸する千花。

千花「よし」

千花、涙を拭いてから嬉々とした明るい表情で一手を差す。

「了」